



Title	エッセイを書く面白さ
Author(s)	山下, 泰春
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エッセイを書く面白さ

山下泰春

私は月に一度、谷町で「ものを書くための、読書会」という市民向けの小規模のワークショップを行っている。その内容を簡単に説明すると、まず短めのエッセイやコラムを読み、次に読書後の議論を通じて感じたこと、考えたことをエッセイとして、参加者の方に実際に書いて頂くというものだ。

もちろんこのワークショップが市民向けということもあり、毎回エッセイを書くための簡単なレクチャーを行っている。だが、参加者の中にはそうしたレクチャーで伝えた内容を軽々と踏襲し、さらにテクニカルな文章を書く人もいたりするので、その際は書く時間を長めに取ったりしている。ちなみに、これまでの参加者には現役の大学生や学校の教員、さらには本職のライターなど、比較的活字に触れる機会が多いように思われる方から、システムエンジニアなどいわゆる理系の参加者も見られた。意外にも理系の参加者も多く、こうしたワークショップにそうした需要があると感じられたのは面白い発見であると思う。

ともあれワークショップについてさらに説明すると、色んな方が参加しやすいように、毎回土曜日の夕方から行っている。ワークショップ全体の時間は、大学の講義時間二コマ分に相当する三時間で、最初の一時半をエッセイやコラムを読み議論する時間に充て、さらに残りの一時半を、書き方のレクチャーと実際に書いてもらう時間に充てている。この形に落ち着くまで何度か細かな修正はあったものの、なんとか一年ほど続けることができたのは、ひとえに参加者ならびに場所を提供してくれるオーナーのおかげである。

さて、そのワークショップで、私がとりわけ印象に残っている回は、失業し自堕落な生活を送っていた人間が、何とかして楽しく生きるための方法を内省的に記したエッセイを読み、参加者の職場でのストレスをいかに緩和するか、あるいはどうやって気晴らしをするか

という議論を行った回であった。その時に書かれたエッセイで、一冊の古本との出会いが、自分がこれまで考えたこともなかったような過去の体験を意味付け、これから歩むべき人生の道を照らし出したという内容のものがあり、より詳しく話を聞いていくうちに、その場合体が盛り上がりつつあったのを今でも覚えている。推測にはなるが、もしもこのエッセイをワークショップ外で読んだとしても、私はおそらく十分面白いと思っていたことだろう。

ところで、エッセイを書くこととは、体験をいわば結晶化することである。参加者と同じテキストを読み、議論することは、その体験の独自性を浮き彫りにすることに繋がる。そして、こうした議論ベースで生まれるエッセイは、兎にも角にも面白くなる傾向がある。なぜなら、そこには必ず他のものを取り込む批判的な視点が含まれることになるからだ。たとえば先ほど挙げた古本のエッセイでも、自身の過去の体験があまり他人と共有できないことに悩んでいたと述べられていた。

こうして考えてみると、エッセイと批評とは実は紙一重の行為なのではないかと思えてくる。というのも、批評とは物事の良し悪しを決定し、価値観を提示するものであるし、批判的な視点を含んだエッセイもまた、最終的には良し悪しを決定したりするものだ。したがって重要なのは、その良し悪しを判断する際の「根拠の置き方」にあると考えられる。批評はより客観的な事実に基づくが、エッセイはたとえそれが主観的な根拠であっても構わない。しかし、どちらも説得的にはたらしめかけないと、独りよがりなものになってしまい、面白いものとは言えなくなってしまう。

本を読んだり、ものを書いたりすることが非常に個人的な経験だからこそ、他者と交流することで生まれる言葉というものを大事にしなければならないのではないか。ワークショップを開催し始めてから私は、そのことをより実感するようになったのである。